



月刊 **みんぱく** 7月号

2025

特集

氷

巻頭エッセイ 後谷戸 隆

ドライアイスの思い出

実

家の天井に穴をあけたことがあります。
子供の頃のこと。テレビで情報番組を見ていたら、「ドライアイスで作る炭酸水」の特集を組んでいました。

炭酸水を無料で用意できるとはまさに天の采配。その頃、我が家では教育的指導により炭酸水はなまかなことでは飲むことのできない貴重な飲み物だったのです。

おあつらえ向きに我が家には生協由来のドライアイス（商品の冷蔵用）が常備されています。これはもう作るしかないではないか、と決意しました。気分はあたかも酒税法逃れのどぶろく作りです。

作り方は次のようなもの。ペットボトルの空き容器を用意し、その中に水とドライアイスを封入します。あとは蓋を締めてドライアイスの中の二酸化炭素が水に溶け出していくのを待つばかりです。

透明な五〇〇ミリリットルペットボトルの中で水と反応してふつふつと白い煙をあげるドライアイスの破片に心をときめかせ、自家製炭酸水が口中で弾ける夢のような気泡の感触に思いを馳せながら、今か今かと完成を待ち続けました。

晩ごはんを終え、テレビを囲んでくだるい時間を堪能

後谷戸 隆

漫画原作者

能していた我が家です。大人になった今振り返ればあれが平和というものだったのでしょうか。

しかしその平穏を突如として打ち破ったのはなんらかの破裂音でした。

衝撃。水しぶきとともにペットボトルの破片が飛び散ります。突然の出来事に身動きすることすらできないわたし。

何が起ったのか理解したのは、天井にあいた「穴」を見たときでした。

つまるところ、爆発したのです。ペットボトルが。

密閉されたペットボトルの中で発生し続けた二酸化炭素が行き場をなくして内圧を高め、ペットボトルの素材が圧力に耐え切れずに爆発、蓋を吹き飛ばして天井に穴をあけたのだらうと思われました。

さいわいこの事件による怪我人はいなかったはずですが、代わりに砂糖を入れた甘い炭酸水を精製しようとしたことがわざわいし、あたりに散らばる砂糖水を拭き取る羽目になったのです。

今でもドライアイスを見ると、そのときのことのひとつそりと二重写しで思い起こされてくるのです。もう二度と帰ってくることはない子供の時代の、ある種の空気のようなものとともに。

プロフィール

1986年東京都生まれ。『お化けのそばづえ』（ドワンゴ）で小説家デビュー。原作を担当した漫画「身代金がこない」でモーニング&イブニング月例賞入選。『きみの絶滅する前に』（講談社）で漫画原作を担当。同作は第8回「さいとう・たかを賞」にノミネート、「このマンガがすごい！2025」オトコ編第17位。超短編集「友達がタイムマシンを作ったので」（KADOKAWA）発売予定。

月刊
みんぱく

2025年 7月号

表紙

オホーツク海の流氷。オホーツク海南部では厚くても40センチメートル程度だが、互いに重なることでさらに大きくなる（網走沖、2016年、北海道立オホーツク流水科学センター提供）

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1 巻頭エッセイ
ドライアイスの思い出
後谷戸 隆

特集 氷

- 2 人類は氷とともにある
黒田 賢治
- 4 ロシアのツンドラで水を得る
池谷 和信
- 5 アラスカの氷下で魚を得る
野口 泰弥
- 6 沙漠で氷をつくるイランの知恵
吉田 雄介
- 8 海水が減ると、食卓も変わる
黒田 寛
- 10 「沈む島」ツバルのアイサ
小林 誠
- 12 みんぱく回覧板

- 14 推しコレ図鑑
アマゾン先住民の世界観を酒壺に
荒田 恵
- 16 ふらりミュージアム
カメルーン国立博物館
平山 草太
- 17 世界の「乗っちゃえ！」
郊外電車で「世界の果て」へ
石田 智恵
- 18 だって調査だもの
「お客さん」の壁を乗り越える
市野澤 潤平
- 20 ばくっ！とフィルめし
ウガリ メイクス ユー ストロング！
板久 梓織
- 21 今月号の地図・編集後記

特集

氷

水は凍って氷となり、氷はとけて水となる。
氷は状態。時間を内包する物質。
ともにあり続けるには、人の英知を要する。
今日の地球規模の気候変動下で、
氷は人類の当たり前に何をもたらししているのだろうか。

人類は氷とともにある

時間を内包する物質

氷。暑い夏に、その字を見るだけで涼しい気分になる。
一気圧下で〇度になれば、水は凝固し氷となる。水以外でもそれぞれの凝固点を下回れば、物質は固体となり、しばしば氷とよばれる。

今日では科学技術の進歩で、手軽に、そして身近に一年を通じて氷を利用している。かき氷のように氷をそのまま食べることもあれば、飲料を冷やすために用いられることもある。調理工程において茹でた麺をしめるなど食材を冷やすため、あるいは食材そのものを保存するためにも用いる。飲食に限らず、体温を冷やすためや怪我の患部を冷やすためにも利用される。氷のない生活など考えられない。

黒田 賢治

民博 助教

日常的な氷の恩恵の大部分は、氷がとける際に周囲から吸収する熱、気化熱によってもたらされている。氷は物質として変化するところで利用され、時間性は氷の重要な特性ともいえる。氷は時間を内包する存在であるのだ。

沙漠でも氷

自然界にある氷は多くの場合、季節的な



保存のため氷に載せられ陳列されるスジアラ
(サウジアラビア ジェッダ市、2024年)

ものとして存在している。これもまた氷の時間性のひとつである。水を主成分とした氷は〇度を上回る環境では水になるからだ。それゆえ〇度を超える環境下で存在する氷は、氷を保存しようとする人類の営みの賜ともいえる。それは沙漠のような高温な乾燥帯ですら見られる。沙漠のなかで、

氷はいかに生成され、保存されてきたのだろうか。反対に、長期間〇度以下の自然環境において、氷はどのようにその時間性を発揮し、人の暮らしに恩恵をもたらしてきたのだろうか。そして、人はどのように氷の時間性が生み出す世界を認識してきたのだろうか。

恵みの不純物

自然界に存在する氷は、純水ではなくさまざまな物質を含んでいる。川や湖、湧き水といった陸上の水だけでなく、海水が凍結した海水もある。それらがとけることは、氷に含まれるさまざまな物質が生命にもたらされることを意味している。あるいは、自然界を冷やし、そこに暮らす生命の適応にも影響する。

ところが、われわれが暮らす地球は、温暖化と寒冷化という気候変動のなかにある。近年の夏がとにかく暑い、とは身近に実感するところである。二〇二四年の平均気温は、一九九一年のそれに比して摂氏一・四八度上昇している。地球の温暖化に伴い、長いあいだ凝固してきた陸上の氷がとけだし、自然環境にも大きな影響を与えている。例えば海面上昇は人びとの暮らしにも大きな



冬に凍るオンタリオ湖(カナダ トロント市、2015年)

な影響を与えている。あるいは、それまで凍るはずであった水が気温上昇によって、凍らないという事態によって、自然循環にも大きな影響が及んでいる例もある。それによって、人びとの生活はいかに変化しつつあるのだろうか。

暑い夏を乗り切るために冷たい氷の話を、ということで企画した本特集だが、もうすらすら寒くなってきた。



夏といえば、かき氷(名古屋市、2019年)



東南アジアでは広くビールに氷を入れて飲む
(ベトナム ホーチミン市、2024年)



上:氷下漁の様子。時間帯が悪ければまったく釣れない
下:釣れたキュウリウオはその場で切り身にしてコマイの釣り餌にすることもある



北方の狩猟採集民の生活には「リズム」があるといわれる。主要な生業活動は夏季に最盛期を迎え、氷に閉ざされる冬季には停滞する。しかし、氷があるからこそ可能な活動も存在する。アザラシ猟や氷下漁である。ベーリング海に生息するアザラシは、春に海水の上で出産する。アラスカ州ヌニヴァク島の先住民であるチュピッグは、海水がとけ始めたころにボートを出し、氷上のアザラシを狩猟する。

二〇二三年のヌニヴァク島調査では、「リズム感」の無いわたしは解氷時期の予想が外れてしまい、滞在中にアザラシ猟を実見することはできなかった。その代わりに同行できたのが氷下漁である。現在、島民はおもに村のすぐ横を流れるメコリヤック川の河口域で氷下漁をおこなっている。対象となる魚はタラの一種であるコマイであり、ときにはキュウリウオも釣れる。両者ともに日本では北海道で漁獲されている。

結氷した川に穴をあけ、釣り糸を垂らすだけの簡単な漁だと思いきや、やってみるとなかなか

アラスカの氷下で魚を得る

野口 泰弥^{のぐち ひろや}

民博 助教

か奥が深い。時間帯、ポイント（釣り場所）が悪ければまったく釣れないのである。目には見えないものの、河口域であるため水下の水位は潮の満ち引きによって大きく変化する。島の漁師は川の地形を熟知しており、潮が満ちてくるタイミングで、水深が深いポイントで釣り糸を垂らすのである。

しかし、近年異変が生じている。わたしに氷下漁を教えてくれた村有数の漁師であるトムも、前年の二〇二二年はコマイがほとんど釣れなかったと言っていた。北極域は気候変動の影響を強く受ける地域だとされ、ベーリング海の海水面積も急速に減少している。氷が生む生活のリズムが今後とも続くかは、不透明である。



コマイ(上)とキュウリウオ(下)

(写真はすべてアメリカ アラスカ州 ヌニヴァク島、2023年)

凍結した川の上をスノーモービルで移動する。
夕方、チュクチの人たちのキャンプへ向かった



ロシアのツンドラで水を得る

池谷 和信^{いけや かずのぶ}

民博 名誉教授

今から約二五年前、わたしたちは、北極海に近いロシアのツンドラ地帯で、冬季に凍結した川の上をスノーモービルに乗ってチュクチの人たちのキャンプに向かった。寒さを除けば、意外に快適であることを実感した。というのは、湿地に近い夏のツンドラで車で移動は非常に困難で戦車のようなヴェズジェホートかヘリコプターを使うしかなかったからだ。

もちろん氷の世界には別のマイナスイがある。トナカイを飼育するチュクチの人びとのキャンプでは飲み水を手に入れることが難しい。人びとは、川の面に張った厚さ数十センチメートルもある氷に穴をあけて、川の水をくみ上げる。容器に入れた水をソリに積んでキャンプに運ぶのは重労働である。これが男性の日課になっていた。

政府によってつくられた集住化した集落でも冬季に水を手にするのは難しかった。冬のあいだでも暖房は供給されるが水道が使えないことが多い。だから住民は、外から運び込んだ氷を家のなかの暖かい部屋で、鍋に入れておく。とけると水になる。年中、水の入手には困らない日本から行ったわたしには、この作業は想定外であった。

一方、海岸部に暮らす人びとにとって、温暖化にともなう海水の融解は、さらなる影響を地域に与えている。氷の上でのアザラシ猟が難しくなり、ホッキョククジラの回遊ルートが変化するなど、今まさに人びとは新たな生活の適応にせまられている。



氷にあけた穴から、下には流れる川の水をくみ上げる

(写真はすべてロシア チュコトカ自治管区、1997年)



容器に入れた水をソリに積んでキャンプに運ぶ

沙漠で氷をつくる

イランの知恵

よしだ ゆうすけ
吉田 雄介

せとうち観光専門職短期大学教授

夏場に氷入りジュース

イランでは、氷室のことをヤフチャールとよんだ。このことは、今は「電気冷蔵庫」あるいは「氷河」を意味する。

ヤフチャールはまるで三角帽子のような円錐形の建物が特徴的である。この氷室に蓄えられた氷は、夏場に氷水や、シャルバツトとよばれる果汁と氷入りの甘い飲み物に用いられた。シャルバツトをイメージできなければ、レモネードを想像すればわかりやすいだろう。

ヤフチャールに似た形状の建築物として、アーブ・アンバルがある。ドームを有するこの貯水槽は乾燥地域の必需品であり、こちらは数が多い。他方、ヤフチャールは数が少ない。つまり氷は贅沢品であり、近代以前には上流階級の嗜好品に留まった。

とはいえ、旅人の喉を潤すこと

もあれば、祭り

の際には貧しい

人びとも振る舞われることもあっただろう。

壮麗なヤフチャール

メイボドは、国土中央に広がる広大な砂漠の周縁地域に位置する。この町の一角には隊商宿、駅通所、貯水槽などの遺跡が集中し、今や観光地となり、休日には大型観光バスも横付けされる。なかでも一六〇一八世紀のサファヴィー朝期に建設されたとされるヤフチャールは、その壮麗さから目を惹く。きれいに修復されたために、往時の姿とは多少外観は異なるが、それでも当



メイボドのヤフチャール。遮光壁の奥に氷室のある円錐形のドーム、手前に製氷池がある。現在は観光地になっている(イラン メイボド、2025年)

時の雰囲気漂わせる。

メイボドのヤフチャールは、貯氷装置だけでなく、製氷装置が併設されており、ヤフチャールの完成形ともいえる。それは三つの部分から成る。

①氷室の部分であり、円錐形のドームの高さは一五メートル、地下の貯氷庫は直径一三メートル、深さ六メートルである。②遮光壁の部分であり、高さは八メートル、南壁の長さは四二メートルに達する。一部のみ残存している東壁と西壁の長さはそれぞれ二〇メートルであった。③製氷池の部分であり、これは遮光壁の北側に設置されており、深さ五〇センチメートルで、面積は八〇〇平方メートルに及んだ。

冬の夜に、山麓の地下水を水源とし、乾燥地域に独特の横穴でもって集落まで導く暗渠の灌漑施設(カナート)の水を、③の製氷池に導水し、薄い氷を張る。冬期は、放射冷却のせいで、夜は氷点下になるが、日中は冬期でも気温が上昇し、氷はたちまちとけてしまう。そこで、②の遮光壁により、

日中の日差しから製氷池を日陰で隠すことで、融解を防ぐ。製氷作業を繰り返せば、しだいに厚い氷が形成される。氷が厚くなれば、砕いて氷の塊をドームの地下にある①の氷室に運びこむ。

泥でできた氷室

こうしたヤフチャールは、すべて泥および泥をこねて整形された日干し煉瓦製である。泥という乾燥地域の身近で豊富な地域資源を利用して作られたのである。材料は同じでも、自然環境を巧みに利用することから地

域差も大きい。メイボドと同じヤズド州のアバルクー地区にも多数のヤフチャールが残る。アバルクーの町から南へ五キロメートルのところにあるヤフチャールは、東西方向に設置された高さ四メートルの二枚の遮光壁が特徴的であり、壁の北側が製氷池であった。また、アバルクーの町はずれにあるヤフチャールは三枚の遮光壁を有する。ヤフチャールのドームの頂上には、氷室内部の暖まった空気を排気するため、排気口として穴があげられている。またドームの下部には、小さな入り口が設置され、そこから氷室の底に氷塊を運び込むための階段が設けられている。製氷が終わると、この入り口は夏まで密閉された。



アバルクーの町はずれにあるヤフチャールの内部。地下の氷室に降りる階段(イラン アバルクー、2025年)



ヤフチャールのドーム頂上部の排気口(イラン アバルクー、2025年)



アバルクーの町の南にあるヤフチャール。ドームの奥に高さ4メートルの遮光壁が東西方向に2枚設けられている(イラン アバルクー、2025年)

右頁上：流氷の割れ目に緑褐色の藻類の集合体アイスアルジーが見える。海水の底部で太陽光を受け繁殖し、春になると海水融解とともに海に放出され、オキアミなどの餌になる（オホーツク海、2019年）



流氷砕氷船ガリンコ号IIと野生のゴマフアザラシ（北海道 紋別市、2011年）

海水を送り続ける、心臓あるいはポンプにたとえられるのだ。海水生成を原動力とするこのポンプは、地球温暖化によって海水生成が減少すれば、機能が低下してしまうのではないかと懸念もある。そしてそれが実際に起これば、北太平洋での生物生産の減少という帰結がもたらされうる。

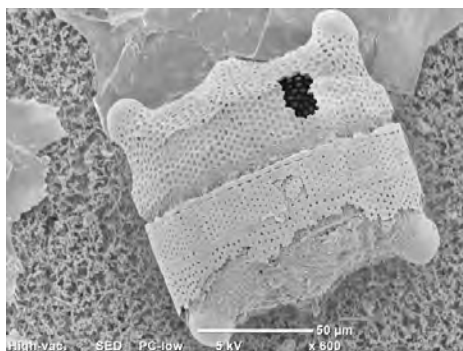
温暖化するところ、寒冷化するところ

海水には海を冷やす役割がある。海水は日射の六割から七割を反射する。一方、海水のない海面では日射の約一割しか反射されず、残りの九割程度が海中に入射し、海水を温める。海水面積が減れば、海中に入る日射量が増え、海水温が上昇することになる。それにより海水融解が一層進み、海中に入射する日射量がさらに増え、海水温も上がる。つまり一旦海水が失われ、諸条件がそろえば、海水減少と温暖化の連鎖的な加速も起こりえるのだ。

北極海周辺では海水が急速に減少し、全球平均の二倍以上の速さで気温が上昇している。反対に、中央アジアや東アジアでは、冬春季の気温が年を追うごとに低下する「寒冷化」が観測された。この寒冷化の半分程度は、北極海周辺の海水減少に起因しているという説もある。同様の寒冷化は二〇〇〇～二〇一〇年代なかごろの冬春季の日本周辺の気温や日本周辺の太平洋の海面水温にも記録されている。

今夜は何を食べようか？

興味深いのは、この寒冷化に呼応するよ



アイスアルジーの600倍顕微鏡写真。0.1ミリメートルほどの小さな藻類の集合体。極海の生態系を支えている（オホーツク海紋別沖にて採集、2017年）

（写真はすべて北海道立オホーツク流氷科学センター提供）

うに、日本周辺の太平洋を回遊する魚にも影響が及んでいることである。主要な漁獲対象種のうちマイワシ、カタクチイワシ、スルメイカ、スケトウダラ、サケなどの一部のグループの資源量が一斉に増加あるいは減少を示したのである。各魚種の産卵期・産卵場周辺で生じた海面水温の寒冷化が、産卵場面積、初期生活期の成長や生残を通じて、多魚種のあいだに同時発生的な資源変動を引き起こしたとも考えられる。地球温暖化にともなう海水減少。それらによるわたしたちの食生活への影響は、現在進行形で身近に及んでいる話なのだ。

海水が減ると、食卓も変わる

くろだ ひろし
黒田 寛 北海道大学 准教授

海水は地球温暖化の進行を可視化する。ここでのいう海水とは、海水が凍結した氷である。

二〇二五年現在、地球温暖化にともない、極域とよばれる南極・北極周辺の海では、海水が前例のない水準にまで減少している。北海道周辺オホーツク海南部に分布する海水面積も、二〇五〇年には現在の三分の一から五分の一度にまで減少することが予測されている。気温の上昇にともなう海水温の上昇により海水がとけ、海水ができにくい暖かい海へと変わりつつある。近い将来、極域の風景が大きく変わることは想像に難くない。

オホーツク海は心臓

海面付近の海水が凍って海水ができるとき、凍らない塩は海水に排出される。海水

下には、これにより結氷温度に近い極低温で、高塩分の高密度水が形成される。例えば、多くの海水が生成されるオホーツク海北西陸棚域では、高密度水が形成される。この重い海水は海水下から深い深度にまで沈み込み、オホーツク海の中層を流れる。そして周囲の海水と混ざりながら、その後、北太平洋の中層へと広がる。じつは、この重い海水には豊富な酸素と植物プランクトンの光合成に必要なたくさんの栄養分が含まれている。それゆえオホーツク海は北太平洋に栄養豊富で新鮮な



野生のゴマフアザラシは流氷の上で出産や子育てをする。アザラシの毛は乾くとフワフワになる（北海道 紋別市、2011年）



筆者が滞在していた家。右側にあるのが、大きな冷凍庫（ツバル フナフチ環礁、2024年）



冷凍庫のなかの魚（ツバル ナヌメア環礁、2025年）

ない。ここ一〇〇万年間、約一〇万年ごとに氷期（寒い時期）と間氷期（氷期と氷期のあいだの暖かい時期）を繰り返して、陸上の水の増減に伴い、海面が大きく変動してきた。ただし、二〇世紀後半から始まる人為的な温室効果ガスの排出に起因する気候変動で、かつての約一〇倍の速さで気温が上昇しているといわれる。アイサ（冷凍庫）も海面の上昇もツバルの外部を起源とするものであり、外部とのつながりのなかで変化する島をツバルの人びとは生きてきた。これまでの変化のなかで培ってきた知恵で、この急激な変化にどのように対処しうのだろうか。とけた氷の行き着く先をこれからも見極めていきたい。

には、カツオやマグロ、あるいはカラフルな熱帯の魚がカチカチに凍っている。食べ物のかち合いが減ると、売買される機会が増え始めた。水産センターのアイサのなかの魚もすぐに人びとが買っていく。

極地でアイサが減ったから

奇しくも、ツバルの離島にアイサがやってきたころは、自然界に存在するアイサ（氷）の減少が問題視され始めた時期でもある。気候の変動により極地の氷がとけて水となつて海に注ぎ、それが海水温の上昇に伴う熱膨張と相まって、世界の海面が上昇してきた。二〇〇〇年代初頭からは、環礁とよばれる低平なサンゴ礁の島々によって構

成されているツバルは、気候変動に「沈む島」として注目を集めてきた。ツバルの首都フナフチ環礁では、一年でもっとも潮位が高くなる二月から三月の大潮の満潮時に地中から海水が湧き出し、また、高潮によって波が陸地にまで押し寄せる。侵食や塩害などの被害も深刻化しているといわれる。そして、近年では適応策としてサンドポンプを利用して海底から砂を汲み出し、大きな埋立地を造成しており、将来的には島の全体の嵩上げなども検討されている。島の



2月の大潮の満潮時。地下から海水が湧き出す（ツバル フナフチ環礁、2009年）

景観は気候変動の影響のみならず、適応策の実施によって大幅に変化しつつある。

アイサも海面上昇も

気候が変動するのは近年に限ったものではなく、熱帯の環礁が極地の水の増減の影響を受けるのも最近、始まったものではない。

「沈む島」ツバルのアイサ

小林 誠

東京経済大学 准教授

島にアイサがやってきた

熱帯のポリネシアにあるツバルの島々には、氷はなかった。ツバル語にも氷を意味する単語は元来、存在せず、現在氷をあらわす語としては英語のアイス（ice）からきたアイサ（aisa）を用いている。ただし、アイサは冷凍庫を意味することの方が多い。

氷がそもそも自然界に存在しないのだから、氷とそれを作りだす近代的な製品が同じ単語であらわされるのは特に不思議でないように思える。

ツバルの離島にアイサ（冷凍庫）がやってきたのは比較的最近の一九九〇年代のことである。人びとが真つ先にアイサに入れたのは、魚だった。それまで大量に取れた魚は家族、親族などで分け合つてすぐに食べられるか、干物にして保存された。現在では、アイサのなかにためられていくことの方が多い。それぞれの家にあるアイサ、島の水産センターに並ぶアイサのなか

上空からみたツバルの首都フナフチ環礁。低平な土地が連なる（ツバル フナフチ環礁、2024年）



みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

臨時休館のお知らせ

運営上の都合により、8月16日(土)、17日(日)は臨時休館とさせていただきます。

みんなく夏休み子どもワークショップ

フィールドワークに挑戦！ 貝でつくって考える 「お金」のはたらき

太平洋にうかがふ島、ソロモン諸島の人びとは、結婚するときやもめごとを解決したいときに「貝でつくったお金」を渡します。それはどうやって作っているんだろう？ お話を聞いたら、みんなで貝のお金づくりに挑戦しよう。

日時 7月21日(月)祝 10時30分～16時(受付10時から)
会場 本館2階第3セミナー室、オセアニア展示場
講師 藤井真(本館 助教)
定員 10名
対象 小学4年生～6年生
参加費 500円
持ち物 筆記用具、昼食、飲み物、軍手



ソロモン諸島ガダルカナル島の貝貨と貝ビーズ

手のサイズに合ったもの、マスク
※汚れてもよい服装でご参加ください。
【申込期間】 6月19日(木)10時から
※事前申込制(1回につき1名の応募が可能)、先着順
※定員になり次第受付終了

みんなくミュージアムバートナイズ (MMP)による催し物

第200回点字体験ワークショップ×点字考案200年記念講演

①点字体験ワークショップ
日時 7月12日(土)11時～13時30分
(最終受付13時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付
②記念講演
「触感」の人類史——誰のための点字考案200周年——のか
日時 7月12日(土)14時～15時
(受付・開場13時30分から)
会場 本館2階第5セミナー室
講師 広瀬浩一郎(本館 教授)
定員 65名
【申込期間】 6月9日(月)10時～7月7日(月)16時
※事前申込制(1回につき2名の応募が可能)、先着順
※定員になり次第受付終了
ワークショップを使った展示場見学
みんなくで世界一周
日時 8月2日(土)10時～16時
(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)、当日随時受付
点字体験ワークショップ
日時 8月9日(土)12時～15時30分
(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付
はじめの二歩
やってみよう！ミラー刺繍
日時 8月24日(日)11時～16時
(最終受付15時30分)

会場 本館1階エントランスホール
対象 6歳以上(5歳以下は保護者同伴)
※申込不要、参加無料、当日随時受付

デジタルブック

大学生・大学院生・大学教員のための活用ブック
『みんなくのディープなトリセツ』を公開

みんなくのコンテンツやその活用術を紹介し、それぞれの目的や関心に合わせて使ってもらうための「トリセツ」として作成したブックレットを、このたびデジタルブックとしてホームページに掲載しました。
※詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。



受賞

「第37回日本アフリカ学会研究奨励賞」を受賞

このたび、本館 池邊智基助教が、「第37回日本アフリカ学会研究奨励賞」を受賞しました。

「第20回文化人類学会賞」を受賞
このたび、本館 岸上伸啓名誉教授が、「第20回文化人類学会賞」を受賞しました。

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
参加無料、申込不要(定員400名)
(8月は休会です。)

第559回 7月19日(土)13時30分～15時(13時開場) 東アジアの婚礼と食

講師 韓敏(本館 教授)

日本、中国、韓国などの事例にもとづいて、婚約から結婚までの過程における食べ物を比較することにより、人間が自然の恵みに与える象徴的意味を探り、文化の多様性と人間の心の共通の仕組みを考えてみます。



漢族の結婚式に欠かせない縁起のよい食べ物(瀋陽市、2017年)

本の紹介

池谷和信 編

『熱帯の家畜と人——飼育と流通を地理学から探る』

海青社 3,960円(税込)

本書は、スイギュウ、ゾウ、ラクダ、リヤマ、ウズラ、バリケンなど日本では動物園でしか会えない動物たちが「家畜」として飼育されている熱帯に注目して、それらの飼育形態とミルク・食肉・毛織物などの利用の形、流通の方式を明らかにしたものです。



佐川徹、岡野英之、大澤隆将、池谷和信 編

『その空間を統治するのはだれか——フロンティア空間の人類学』

ナカニシヤ出版 3,850円(税込)

本書は、19世紀から現在までのグローバルサウスと呼ばれるアフリカ、アジア、ラテンアメリカの国々を対象に国家による統治が希薄な地域に注目しています。各地でのフィールドワークをもとに得られた資料から、国家や企業などの各種アクターによる地域統治への関わり方などが実証的に論じられています。



内藤直樹、森明子 編

『寄食という生き方——埒外の政治-経済の人類学』

昭和堂 5,720円(税込)

本書は、従来の政治や経済の論理をはみ出た(埒外)の存在である(寄食者)を断罪するのではなく、彼らの論理や実践に目を向け、様々な価値観に開かれた理解を目指しています。制度の(埒外)に位置づけられがちな、困難を抱えた人々を支援する営みのなかに、社会的創発の可能性を探りました。



友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先

国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)

FAX 06-6878-3716

E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信

友の会会員：無料

一般(会場参加のみ)：500円

※事前申込制、先着順

※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第562回 7月5日(土)13時30分～15時

「島の宝」になった写真

——阿波根昌鴻写真と伊江島の記憶

講師 高科真紀(本館 助教)

会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)

第563回 8月2日(土)13時30分～15時

激戦地の現在——ソロモン諸島の人びとの戦争経験と戦後誌

講師 藤井真一(本館 助教)

会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)

およそ80年前に太平洋戦争の最前線とな

ったソロモン諸島。日本軍や連合国軍の視点

から描かれた作品などは数多あるものの、現地の人びとが戦争をどのように経験したのか、いかに関わったのかはあまり知られていません。本講演では、ソロモン諸島の人びとの戦争経験とともに、現在にも及ぶ太平洋戦争の影響についてお話します。

東京講演会

友の会会員：無料

一般：500円

※事前申込制、先着順(定員45名)

※オンライン配信はありません。

第140回 9月28日(日)13時30分～15時

ユダヤ・ディアスポラ文化と現代イスラエル国家

——そのねじれの深層を読み解く

講師 赤尾光春(本館 特任助教)

会場 JICA地球ひろば セミナールーム600

(東京都新宿区市谷本村町10-5)

夏休み・友の会ワークショップ つくって・学ぼう！ 世界の文化

小学生・中学生対象のワークショップです。友の会会員をとおしてお申し込みいただくと、友の会割引価格でご参加いただけます。

①ビーズで世界とつながろう！

——ペーパービーズづくり

②海のくらしを知ろう！

——パンダナスで小物づくり

日時 7月27日(日)、8月3日(日)

①10時30分～12時00分

②14時00分～15時30分

会場 本館2階第3セミナー室

友の会割引価格：300円

一般：500円

※事前申込制、先着順(定員各回24名)

容器(壺)

標本番号 | H0210711

地域 | ペルー

民族 | シビボ

サイズ | 幅50cm×奥行54cm×高さ51cm

展示場 | 非公開



◆ 推しコレポイント ◆

太い線で描かれた幾何学文様は、地面を這(は)うアナコンダにもみえる。その内部を埋める細い幾何学文様はさながら鱗のよう。曲線美が際立つ器形にも是非ご注目!!



推しコレ図鑑

アマゾン先住民の世界観を酒壺に

あらた めぐみ
荒田 恵

天理大学附属天理参考館 学芸員

祭りが終わると捨てるチョモ

緻密で美しい幾何学文様が描かれたこの大きな壺^{つぼ}には、なぜかはわからないが目にした瞬間に吸い込まれるほどの魅力がある。魅入られたように時まで忘れてしまうのはわたしだけだろうか。

この大きな壺は、ペルー中部から北部にかけての熱帯雨林地帯、アマゾン川の支流であるウカヤリ川沿いに暮らすシビボ族の女性によって、精魂込めてつくられる。シビボ族の祭りで振る舞うお酒を発酵させるための容器で、チョモとよばれている。大切にされ代々受け継がれてきたものかと思いきや、祭りが終わるとその役目を終えて捨てられる。コレクターや観光客に売られるならまだしも、家の床下の片隅に放棄されると聞くと少し切ない。しかしシビボ族の女性には、しばしば、家の周りや畑などで古い壺の破片を集めて、それらを砕いて新しい壺をつくるための粘土に混ぜる。つまり捨てた後で一部を再利用し、再生させるのである。じつは、この行為はシビボ族の世界観に基づいている。

アナコンダの鱗?

彼らは、大蛇アナコンダをもっとも重要な万物の源として神聖視するだけでなく、川と結び付けて母なる水の精霊ともみなす。

蛇は定期的に脱皮して若返る。先に述べた古い壺の破片の再利用も、それになぞらえている。死と再生が繰り返されるというアンデスの先住民に特有の時間観念が、土器づくりに反映されているのである。そして大きな壺は蛇がとぐろを巻くかのように、粘土^{ひも}紐を積み上げて形づくられる。仕上げて描かれる幾何学文様はアナコンダの鱗^{うろこ}をあらわすともいわれるが、誰にでも描けるものではないらしい。文様を描くことができるのは、ピリピリとよばれる薬草を用いた治療を受けて病気が平癒した経験がある女性に限定される。彼女たちは治療を経てシビボ族の真の思考力を手に入れ、彼らの世界で起こる物事を幾何学文様で正しく表現することができるという。わたしが一目で魅せられてしまうのは、神秘的な彼らの世界観を肌で感じとっているからかもしれない。



今ではおもてなしのために着用する民族衣装。泥染や刺繍(ししゅう)により、彼らの世界観を幾何学文様であらわす(ペルー ドスデマジョ先住民コミュニティ、2009年、大橋麻里子氏提供)

共振するフィールドの^{いま}現在

カメルーン国立博物館（ヤウンデ）

ひらやま そう た
平山 草太

東京大学 特任研究員

「カメルーンのハウサの人びとの歴史を調査している日本人がいる」という話が披露され、聴衆のうちに感涙する者も出たという噂を聞いた。カメルーン国立博物館で開催されたイベントのこと。その日本人とは、どうやらわたしのことらしい。わたしは一〇年近く、カメルーン的首都ヤウンデでフィールドワークをおこなってきたが、そんなこともあり、二〇二四年二月に初めてその博物館に足を踏み入れた。現地の博物館がどのような物語を人びとに示しているのかを確認したいと思ったこともある。

もっとも強く印象に残っているのが、常設展示の民族楽器の列に加えられていたエレキベースだ。カメルーン出身の著名なミュージシャン、ントウンバ・ミンカ氏のエレキベースである。二〇二〇年に氏が死去した後に寄付されたものだ。このエレキベースは、博物館の展示物は常に追加されうること、そしていかにもな民族楽器と現代的なエレキベースが並置されるという、あまり意識されないが当たり前でもある事実をさりげなく示す。



カメルーン北部地域の物質文化に関する企画展の様子



展示される楽器群
（写真はすべてヤウンデ、2024年）



ントウンバ・ミンカ氏のエレキベース

そこにあるのは、固定された過去の痕跡ではなく、むしろ現在を生み出す運動である。ントウンバ氏のエレキベースは、自身の研究もまたフィールドの過去の単なる再現ではなく、むしろ現在を生み出す運動への参与であるという、研究者にとって避けて通ることのできない事実を意識させた。冒頭のイベントのエピソードをはじめ、国立博物館への訪問は、フィールドとの今後も続く長いつきあいに向けて、自身の筆の担う重責への覚悟を迫るものであった。

郊外電車で

「世界の果て」へ

いしだ ちえ
石田 智恵

早稲田大学 准教授

アルゼンチンの日系移民コミュニティの調査をしていたあるとき、ブエノスアイレス郊外のある町の日本人会が主催する地域行事の「祭り」を訪問したことがあった。中央に盆踊りのやぐらが置かれ、周囲に食べ物や手作り雑貨など多種多様な屋台が軒を連ねる賑やかな会場で、屋台のひとつを



上：「祭り」会場。奥にカラフルな屋根の屋台が見える（ブエノスアイレス州、2014年）

下：郊外南部に向かう電車のターミナル駅構内（ブエノスアイレス市、2013年）

覗き込んでみると、顔見知りの若い日系人に出くわした。「ひとり？ どうやって来たの？」と尋ねられ「ひとりで、電車であつたよ」と答えると、彼女はやや眉をひそめて「電車で?! 勇気あるわね!」と返すのだった。その一言でわたしは、「南米のパリ」とよばれるブエノスアイレス市内で彼女が生まれ育ち、郊外へは自家用車でしか出たことがない、と確信した。

国の全人口約四六〇〇万のうち、首都であるブエノスアイレス自治市そのものに暮らすのは約三〇〇万人であるのに対し、郊外（市の外側はブエノスアイレス「州」である）の人口集中地帯も含めた大ブエノスアイレス都市圏ではその人口は約一五〇〇万人に上る。自治市を取り囲むように、市境に沿って高速道路「国道A〇〇」（通称「ヘネラル・パス」）が走っており、毎日朝早くから、郊外に住む多くの労働者や学生がバスや電車で

ヘネラル・パスを越えて首都に通い、夕方にはまたそれを越えて帰宅する。

壮麗な建物が立ち並ぶ首都とその「外」には何とも形容しがたい隔たりがある。首都から郊外への移動はしばしば、格差や階層、そして多様性を実感する旅になる。例えば未舗装で土埃の舞う道路、煉瓦や漆喰造りの平屋建ての家、傷やへこみだらけの自動車や「白い」とは言われないだろう肌の人びとの多さ。そして電車の中では、通勤帰宅ラッシュ時には車両に入りきらない乗客がデッキに出て風を浴びながら揺られている。

市内から見て「向こう側」とよばれる郊外の住人が、「わたしたちは世界の果てに住んでるからね」と自虐的なジョークを飛ばすのを聞いたことがある。ブエノスアイレス市という「一部」をアルゼンチンの「全体」に置き換える間違ひは、外国人であるわたし自身もよく陥るものである。だがもし市の内外に「西洋先進国」と「発展途上国」のような差異があるとすれば、その差異を抱えるのがアルゼンチンという国なのだ。郊外に向かう電車はそのことを教えてくれる。

「お客さん」の壁を乗り越える

いちのさわ じゅんぺい
市野澤 潤平 宮城学院女子大学 教授



二〇〇〇年代半ば、タイのビーチリゾートであるプーケット島の某ダイビング・ショップに就職し、インストラクター兼ガイドとして働いた。観光ダイビングの調査をするためである。

ダイビング・ガイドの仕事

そもそもダイビングの下素人であつたわたしは、まず半年以上を費やして必要な訓練と試験を受けた。その内容の大半は、客の安全管理にかかわるものだ。例えば海中でパニックを起こして暴れる客の、首根っこを押さえつけて安全確実に水面まで連れてくる力量が、ガイドには求められる。

朝の七時にビーチエリアのショップに集合して、当日の船の運航やダ

イビング・ツアーの段取りを確認、食事など必要な手配を済ませる。八時ごろから順次ホテルをめぐって客をピックアップ。そのまま船に乗り込み、海中世界をご案内。夕方、客を宿に送り届けた後は、翌日の出航とダイビングの準備、事務作業、そして客の夜遊びにおつきあい。拘束時間の長い仕事だ。

わたしの経験からいえば、就職という形で事業組織に入り込む「参与観察」で重要なのは、他の従業員と同じ条件／扱いで働くことである。ダイビング業界の調査に来た日本の大学院生です、などと聞けば、現地のスタッフたちは、何をあら探しされるのかと、少なからず身構えるものだ。わたしもプーケットでは、業務内容に制限を設けず、観光業にあ

りがちなブラックな扱いも甘んじて受けることを何カ月も続けて、ようやく「お客さん」扱いを払拭できたように思う。

一例を挙げると、客のダイビング器材を丸ごと海に落



上:客のダイビング器材を運搬する筆者(タイ プーケット、2009年)
下:クルーズ船の共有デッキにて、1日のダイビングを終えてくつろぐ客に、海中で見た魚の解説をする筆者(タイ シミラン諸島、2009年)

として紛失した事故があつた。日本円で二〇万円ほどの損害となつたが、会社は保障せず、わたしを含むダイビング・スタッフたちが弁償させられた。年末年始の繁忙期には、早朝から夜中までの二〇連勤。船上で寝泊まりするクルーズ・ツアー中に甲板で浮かれて明け方まで飲む客につきあい(会社の方針による接客義務と

して)、睡眠不足の日々が続いた結果、水中で寝落ちして溺れ死にそうになったことも。

「調査者」扱いされなくなる

観光におけるゲストは、ホストたちが仕事で客に見せる顔の「舞台裏」を知りたがる、という古典的な議論がある。例えば、接客スタッフと顔

なじみとなつて事情通を気取る常連客。芸能の世界と同じで、ときに常連客は「舞台裏」を見ることが許されるが、じつのところそれは、客に見せることが前提の「舞台裏として演出した表舞台」に過ぎない。そして我々文化人類学者も、「舞台裏」



筆者が海中で発見した、赤のデニス・ビグミーシーホース。その後、筆者はビグミーシーホース探しに熱中するあまりに時間を忘れ、30メートル弱の水深でエア切れとなつた(インドネシア ミスール、2017年)

が、仕事をうまくこなすための実務者としての視点で、調査者の視点に優越するのである。そうなつてくると、周囲のスタッフたちも調査者を「調査者」扱いしなくなる。「お客さん」と自分たちを隔てる見えない一線の、内側に入れてくれるようになる。中島敦の『名人伝』ではないが、仕事に打ち込んで調査を忘れるぐらいが、就職という調査法の極意とい

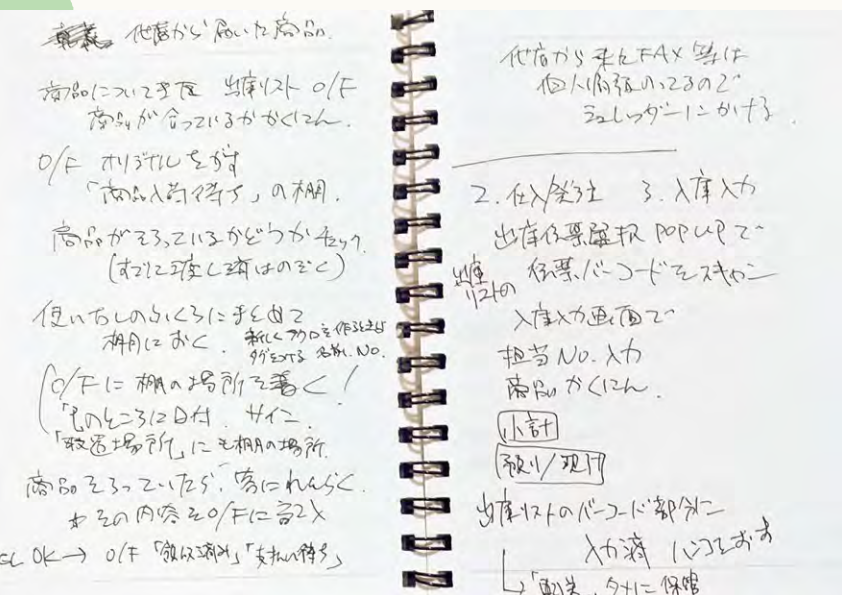
えるかも知れない。いわゆる、参与と観察のスペクトラム。その参与側に振り切った果てには何があるのか? ふと気が付くと、彼らが「お客さん」には絶対に見せない話さない、あれやこれやを自然と共有できているのだ。わたしも調査としてダイビングの仕事に打ち込んだ結果、現場だけのあんな話やこんな事実を知るに至つたが、それらは残念ながら公には書けない。——もつと真摯に調査に進めれば、やがては調査とは何かすら忘れてしまふのだろう。



ダイビング・クルーズ船。ただし筆者が乗務した船とは異なる(インドネシア ラブアンパジョ、2024年)

を見たがるという意味では前述の常連客と似たようなものだ。内部情報を得たがる「調査者」として振る舞っている限り、「本音らしく演出された建前」の裏側は、なかなか見せてはもらえない。

そこで、メモ書きや聞き取りとといったかにも「調査」らしき行動は、「お客さん」感を醸し出すので、潔く止めてしまふ。そもそも、高度な接客の仕事は、客とのやりとりを意識を集中しなければ良い結果を生めないため、真面目に取り組むほど、観察よりも参与の比重が高まる。正確には、客や状況の観察はする



ダイビング器材販売の参与的調査をおこなった際のフィールドノート。単なる業務メモである

ウガリ メイクス ユー ストロング!

いたく しおり
板久 梓織 東京都立大学 特任助教

調査地に入るとき、わたしはいつも覚悟を決める。ウガリをたくさん食べるよう勧めてくれる人びととの攻防に対してである。

ウガリとは、基本的にはメイズ(粒がしっかりとしたトウモロコシ)を粉状にしたものを湯で練ったもの(家庭によってはキャッサバやシコクビエなどが加えられる)で、野菜や肉、魚と一緒に食べられる。地域によってシマ、サザなどとよばれ東アフリカで広く親しまれているが、このウガリをこよなく愛するのがグシイというケニア西部で暮らす人びとである。

わたしがグシイの人びとに、とにかくよく言われるのが「もっとウガリを食べろ」である。ウガリは蒸しパンのような食感で、素朴な味がする。かなり腹持ちがよく、いつも少量でお腹が満たされるのだが、グシイの人びとは「ウガリ メイクス ユー ストロング!」とウガリを頬張りながらわたしに強く勧めてくれる。

グシイの人びとは、1日に1度はウガリを食べないと気が済まない。「ウガリを食べているから1日中畑仕事ができるのさ」と言われると、ウガリを食べて、メイズを育て、またウガリを食べるというウガリ・サイクルを想像してしまう。

毎日ウガリばかり食べていると、他のものが恋しくなる。そんなとき待ち遠しいのが、滞在先の家の20代長女の帰省である。高校在学中の寮生活時から就職し家を離れた現在に至るまで、数カ月から半年に1回の割合で彼女は実家へ帰ってくる。帰省中、彼女は一家の台所を任される。グシ

イの若者だって食のバリエーションを楽しみたいようで、コメやイモ、バナナ、マメ、インスタント麺などを調理する。体の隅々までウガリで満たされているわたしは、彼女の帰省が楽しみだ。しかし、そういった食事とは別に、長女は両親のためにウガリもちゃんと用意する。当然その分調理に時間はかかるし、食事の時間は遅くなる。しかしこの方法がさまざまな食を楽しみたい長女の思いと両親のウガリ欲を同時に叶えるための解決策なのである。彼女が数日から1週間の帰省を終えると、一転してわたしの食生活はウガリ・フル・ライフとなる。

ちなみに、人びとから日本に連れて行ってほしいと言われた際、日本でウガリは主食ではないことを伝えると、すぐ「じゃ、無理だ」と返される。もちろん冗談半分の話だが、引き下がりの速さに、グシイのウガリ愛を実感せずにはいられないのである。



ある日の食卓。祖母が食事を取り分けている。各皿にのっている塊がウガリ。大きなウガリの塊から皿を使ってよそうので、お皿の型がついている。おかずはケールを炒めたもの
(ケニア グシイ地方、2022年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

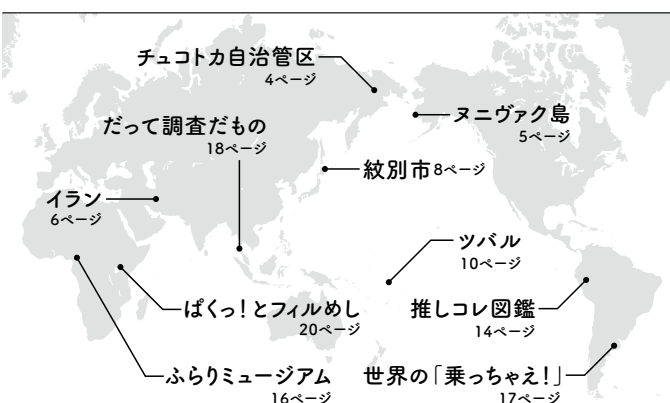
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

20年あまり前のことをふと思い出した。ベトナムでサトウキビ畑の丘に茶店が一軒。サトウキビ搾汁の氷割り「ミアダー」を注文したら、小一時間待つ羽目になった。店の少年が近くの町まで自転車で氷を買いに走らねばならなかったからだ。電気のない農村に氷はない。いっぽう、氷のない都市生活なんて成り立たない現実、本特集で気づかされた。この「氷」は、ツバルのことば「アイサ」のように冷凍庫も含む意味だ。今や飲食、流通、保存、医療、製造その他あらゆる分野で、氷の必要性はますます増している。

アフリカに発生した人類は、極北の環境に一度は適せねば南米大陸まで拡散できなかった。してみると、人類史

は、氷と闘い、氷になじみ、氷を支配

する歴史でもあった。その先に到来

した地球温暖化は、人類の生存ま

で脅かそうとしている。これって

もしかして氷の捨て身の逆襲……

なんて思うと、猛暑日なのに背筋

がヒヤリ! まもなく戦後80年。

(樫永真佐夫)



次号の予告 8月号

特集「人形(ヒトガタ)の力」(仮)



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

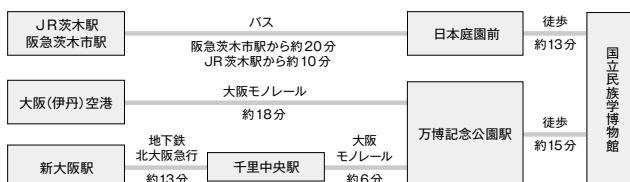
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 780円/大学生 340円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



ひとりひとりのご参加が、 国立民族学博物館と友の会の活動を支えています。

国立民族学博物館友の会は、国立民族学博物館（みんぱく）の活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。21世紀は地球上のいたるところでおたがいを認めながら、ともに生きてゆく考え方が求められています。世界の暮らしの多様性にふれ、それを解き明かす文化人類学・民族学の知見がますます重要になっています。みなさまのご支援とご参加をお待ちしております。

訪れるたびに発見がある

博物館を 何度でも楽しめる

年間何度でも本館展示と特別展をお楽しみいただけます（一部の特別展は割引料金適用）。館内で開催する催しへの参加もスムーズ。研究公演など一部の催しの参加の参加会員優遇枠もあります。



最新の情報をいち早くお届け

『月刊みんぱく』 年12回発行

『月刊みんぱく』はみんぱくの広報誌です。展示や催しの情報のほか、資料の解説や現地の様子、調査の動向を親しみやすいエッセイやコラムで紹介します。



人びとの営みの真髄にふれる

『季刊民族学』 年4回発行

友の会の機関誌。世界の諸民族の社会や文化に関する正確な情報を平易かつ読み応えのある文章、豊富なカラー写真で紹介する、あなたの知的欲求に応える市民向けビジュアル学術誌です。

さらに踏み込んだ話題提供

友の会講演会

友の会講演会は毎月第1土曜日に館内で実施するほか、年数回、東京でも開催しています。



研究者が同行する国内外の旅 民族学研修の旅 体験セミナー

現地経験豊かな研究者が同行する民族学研修の旅（海外）、体験セミナー（国内）をご案内します。

※参加費は実費が必要。

ほかにも、公園周辺施設や提携館の割引利用など、お得なサービスをご用意しております。

お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会

公益財団法人 千里文化財団

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

入会方法は友の会ホームページに記載しております。

